仮称

“きび”考

創刊号 2010 年(平成 22 年)7 月

日本先史古代研究会

目　　次

設立宣言と賛同者		(3)
設立基調講演	会長　若狭哲六	(4)
設立記念講演	大守　隆	(9)
私の熊山遺跡考	若狭哲六	(17)
備前焼　①土の章	木村玉舟	(18)
吉備の語源「黄蕨」調査報告	丸谷憲二	(20)
編集後記		(24)

「 設立宣言」

日本列島には、遠く西アジヤや中国からもたらされた、「 知られざる古代遺跡」が数多く存在している。考古学・歴史学・民族学的分野を超えての「 先史的見知」により、分析・調査・研究を駆使して、日本の歴史を正すことを目的に、賛同者有志一同で「 日本先史古代研究会」を設立する。

平成 21 年 5 月 30 日

設立賛同者代表　延原勝志

下記の皆様に賛同戴きました　（順不同をご了承下さい）

李　学勤・大守隆・原寿男・劉　勝徳・全（チョン）　浩天（ホ・チョン）・松浦宣秀・守分清身・若狭哲六

木村玉舟・池本敏明・石井雅之・柳瀬昭彦・松田教孝・白　黎明・稲見圭紅・三村隆司

田原隆雄・草下智子・小林妙子・上原道弘・難波和雄・御宿龍・勝部嘉樹・勝部由実

佐々本芳資郎・河田浩二・薮田徳蔵・黒沢泉・若松幸成・田原隆雄・大枝正・藤井誠

藤井圭一・藤井正昭・金光一真・田淵博史・春木谷広義・青山裕一・柘植順治・延原勝志

樋口俊介・石田桃子・井上秀男・山崎泰二・丸谷憲二・片山伸栄・本松一郎

あまり聴けない　**郷土(古代吉備＝昔の岡山)の　講演会**

	日時:2009年5月30日(土) **設立総会＝14:00より開催** **記念講演＝15:00** **基調講演＝16:00** **場所:備前焼伝統産業会館** **JR赤穂線伊部駅ビル** **備前市伊部1657-2** **電話(0869)64-1001**
謎の霊山＝熊山遺跡は日本先史の原点	**主催　日本先史古代研究会** **後援　備前市教育委員会**

記念講演　「見直される、地域と歴史の絆」講演者＝大守　隆　先生

先生は吉備津彦神社の元社家（神職）第79代当主で、現在内閣府参与でアジア太平洋協力会議（ＡＰＥＣ）経済委員会議長として日本国を代表し、主に東南アジアで活躍中です。

基調講演　「太陽巨石文化の流入と古代太陽信仰」講演者＝若狭哲六（当会主宰者）

「女王国邪馬台国の謎に迫る」など著書多数・霊山熊山の麓で日本先史古代研究会を主宰

日本先史古代研究会設立基調講演　当日のレジメ

演題「太陽巨石文化の流入と古代太陽信仰」

講師＝若狭哲六(先史古代研究会主宰者･会長)

1）　太陽巨石文化の発生と世界分布

太陽巨石文化の発生は、今から7000年前（BC5000年）頃にチグリス・ユーフラテス両河川間の地域一帯の総称であるメソポタミヤに起源を知ることが出来る。メソポタミヤに早くから農耕技術が生まれたのである。

農耕技術を主とする文化は彩文土器を有し、甑（こしき）形土器・石包丁・土石製腕輪・イネ・ドルメニ・女神像・言語・文様の文化を築き広く世界に分布したのである。私の考えでは日本への伝播したのは、ＢＣ2000年頃（縄文末期）と推測しています。この頃日本列島においては先住民（土着原住民）が旨く結合され日本人の骨格が整ったと考えられる。太陽巨石文化の流入は日本列島にとって国造りに大きな役割を果たしたと言えよう。列島に遺存されている巨石（磐座（いわくら）=神・霊）の存在を知ることは古代文化の原点を問い直す貴重な資料である。

2）　太陽巨石文化の流入と古代太陽信仰

太陽は毎朝東の空に姿を現し、中央に昇りついで西空に移りやがて姿を消す。地球の自転を説いたコペルニクスは当時の宗教界から批判され迫害を受けたことも衆知の事実である。

人類の多くは地球が円球であることも知らなかった。太陽は大地の或る所から出現し夕方には地中に姿を没することになる。地中に姿を没した太陽はどうなるのか、明日もまた太陽は姿を見せるのか、若し太陽が無くなったらどうなるのか。昔の人間にとって太陽の存在は謎であり、しかも無くてはならぬ「大いなる神」であった。

原始・古代における太陽信仰は、太陽そのものの存在への切実なる祈りから成立した。だから夏至から冬至に至る太陽の軌道に敏感であった。電気の無かった時代の夜が暗かっただけ朝の太陽への期待は如何に大きかったか。太陽巨石文化の成立を考える時、我々は過去の太陽を過去の歴史の中で見直して見る必要を痛感する。（この文は私が自説を書にした（1991年12月発刊）本に寄稿戴いた小川光暘博士の「発刊によせて」の文による）

若狭氏講演内容

こんにちわ。私は今から２４年前、ここで第１回熊山に関する研究発表をした覚えがあります。その題名はなにか。それは「古代国家形成の謎」という題で、ここでやった覚えがあります。それから２５年間、歩いているうちに私は大変な遺跡の存在を知る事ができました。それもひとえに熊山の遺跡に取り組んだために熊山の魂が私に乗り移ったといいますか、あそこへ行けここへ行けと。指示されながら２５年間歩いてまいりました。その中で多くの人にお目にかかりました。

北京の中国社会科学院の、今現在は清華大学の先生なんですが、その先生とお会いし、そして多くの方々にお会いしそして今日の私をここまで大きくしてくれたのは、その方々ではなかったか。と今感激しながらお話しさせていただきたいと思います。本当に今日まで、私のようなわがままな男をですね、ここまで引っ張ってくれた多くの方々に感謝しながら私は、持ち時間精一杯お話をさせていただきたいと思います。

熊山の遺跡がなかったら、恐らく、この壇上に立っておりません。熊山の遺跡が私をここまで運んでくれたのでは。と私は自負しております。いかに、熊山遺跡が秘境のものであったかということは、これからもそれを胸に抱きながら研究を進めると思います。まず、考えないといけない事は、今日も新聞に出ておりました「卑弥呼の墓はあの桜井市の箸墓ではないか。」とこういう話でしたが色々な説があります。しかし、それが果たしてそうだ。と言えないんです。なぜ言えないかと言うとそれは真実がわかってないからだと思うんです。で、真実を掴むには色々な角度から研究しなくてはなりません。私も古代と大きな言葉を使っていますが、こういう勉強をよもやしてみようという気はなかったんですね。やっているうちにだんだんとそうなってきたわけで。まず、そこで歴史を解明し或は歴史を知りそれを考えていく上では何がなんでも１つ原点は何か。という事を掴まなければならない。私はそれをずっと考えておりましたら、今日この席にもおられます事務局長の山崎さんがワタシの考えに共鳴してくださり、ワタシは山崎さんの話はあまり聞きません、しかし山崎さんは私の話をよく聞いてくれました。そんな中でふと私が感じた事は、「紀元２６００年というのは、昭和１５年にワタシは小さいときに聞いておりますが、日本の歴史は一体どこから始まるのかと。

皆さんご存知のように、日本の歴史の始まりは奈良である、あるいは大和であると。それに私は学者じゃないから反論しません。しかし私の主張は述べてみたいと思います。それは、何かといったら、私たちが住んでいる古代の吉備の国。ここが私は大和朝廷が出来上がっていく、原点ではなかったのか。と私はそう思うんですね。そして、その中に忘れてはならないものがあるんです。それは、太陽の巨石文化というものがいつの時代にこの列島に入ってきたか。そして入ってきたものが、土着の民族。つまり日本列島に最初から住んでいた人たちとうまくまとめあげながら、ひとつの骨格ができたんではないか、よくご存知のように天照大御神が岩山に隠れて誰かがひっぱりだしたとか。
色々ありますね、それはお話だと思うんですね、ワタシは古代の人たちが実際に体験、経験した事は、わたしは「太陽」だと思うんですね。その太陽の巨石文化がどういう文化なのか。それを申し上げますと、太陽巨石文化のはしりと言うものは今からおよそ 7000 年前、BC5000 年ですね、チグリス、ユーフラテス河の両側地域一体のメソポタミアにその起源を知る事ができるんですね。メソポタミアに農耕技術が生まれたので、農耕技術を主とする文化が彩文土器を有していた。この彩文土器が、実は日本の伝統の中の歴史を塗り替えているんですね、私はそういう風に考えております。で、この中にはコシキ型土器。これは九州の鹿児島県に鹿児島湾からちょっと西にえみしの沖に、コシキ島という島がある。ワタシはここへ最初の日本列島に流れ込んで来た人たちの到達した遺跡があるのではないか。と思います。

そして、その古式土器、石包丁、腕輪、それから稲、女神像、言語、文様、いろいろな文化を築き、世界に分布したのであります。ワタシの考えでは、日本に伝播したのは、BC２０００年、今から４０００年前、つまり縄文時代の中期後葉からこうようでしょうかね。この熊山の東側の私達が住んでいる備前市の西片上に、以前、縄文の住居跡が出ました。これが４５００ぐらい年前の物ですね。この住居跡は縄文の末期と推測している私の考え方に果たして合うんだろうか。とそれを教えてくれるのは何も言わない、ただ山に固まっている石が教えてくれるのか。それは、そうではないんですね、太陽巨石文化というものの中に石組みっていうものが、太陽とか月とか星とか、それを計っていくだけの仕組みをちゃんと作ってるんですね。特にそういった物には資料の中にもございますが、ご存知だったら行ってみてください。岡山市、岡山県立美術館ですかね、あの裏に天神山という山があるんですね、昔の文化センターの一角に素晴らしい石の固まりがあります。それは、完全に宇宙との更新をしている文化なんですね。これを太陽巨石文化と言っているわけですね、それから、この列島の中にはいろいろな形の巨石，磐座があって神様が降りて来た精霊地であるとか色々な事を言われますが、そういったものが残されておりますね。特に添付資料の中に A,B,C,D,E という風に分けております。

太陽巨石文化の発生と社会分岐、瀬戸内海では岡山県笠岡市の巨石、磐座の配置、これは近所のたかしまという島をご存知ですかね。笠岡の港を出て約３０分ほど沖に出ますと、たかしまという島があります。そこには素晴らしい遺跡が残っております。それから一宮の吉備のなかやまの巨石、このなかやまには、鬱蒼として木々の間から見え隠れする大きな石、磐座があります。ここでもやはり、古代の人たちは太陽を拝み、星を拝み、自分たちの生きる道は何なのか。という事を残しているんですね。また機会がありましたら、一度吉備のなかやまへ足を運んでみてください。それで、その中には大変な遺跡も残っております。

実は、熊山遺跡の形態というのを、なぜ私がやったか。という事を一言、申し上げておきましょう。私は２０数年前に、熊山遺跡から出て来た、あの遺跡が盗掘されます。と昭和１３年６月の梅雨の終わりに、山の上に上がって壊したんですね、まあ、壊したからこそ私も勉強出来たんですけど。よし。それならワタシは遺跡の分析ではなく、一体ああいう真四角な３段、４段積み上げたのは何が目的か。そこに目をつけて私は真夜中に１人、片手にナタ、片手には棒を持って、腰には磁石を持って上がったんですよ。そして、上がってはならない遺跡の真ん中に上がって磁石を当てましてね、そしたらどうも遺跡というのは真四角なんだけれども、北に向かって傾いてるんですね、その角度が１５度だったんです。ワタシはなんで１５度傾いているんだろうと考えておりましたら、古代の天文学をやっぱりやらなきゃ、この問題解決できないなと思い、色んな本を呼んで歩いてきましたが昔のメソポタミアで、天文学を取り入れ、農耕技術を盛んにし、農業を盛んにした人たちの、、、面白い事があったんですね。木火土金水　その木星が１２年に１回もとの位置に戻る習性を持っていたんですね、それを西アジアの古代天文学者は長いこと測定して地球を１２等分した。円を１２等分したら３０ですね、これを１２宮という、牡羊座、牡牛座、などありますねそういう物を編み出したわけです。そして次にこの木星を春分に制定したわけですね。黄道と赤道が交わるところが春分と言うのだから。

ところが東アジアの天文学者とは、冬至点。ですね。春分点というのは、だいたい、図を書いてあると思うんですが、これが東でこれが西。これが、ここで計ったのが西の天文学者。これから３０度下がったとうじの日ですな。この冬至の日に今度は木星を計ったんです。そうするとそこに、１５度というと東アジアの天文学者は根よく根よく計ってるんですね。それで今度は西アジアは、１２等分し、東のアジアは２４に切ったんですねなんで２４にしたかというと１５度。冬至点で木星を計ったらしゅんぶん点との間に１５度の差ができたんですね。それを私に教えてくれたんじゃないんですよ。私が熊山遺跡の形態から編み出したんです。それは間違いかもしれません、しかし私は真実・・・実際にそうですから。それで何故、１５度つけたのだろうか。そこにはですね中国、古くから西アジアから発生した天文学的な法則から或は東アジアの古代天文学者がゆっくりと、自分たちの生活の場に行きながら、何を作ったかというと、ちょっと説明がおかしいんでそろそろ、事務局から叱られるんですけども、「道教」これを知っておられますか？道教っていうのは、中国での民間宗教なんですけど、知っておられる方おられますか？ちょっと手を挙げてみてください。・・・知っておられんなぁ。これは、やっぱり道教から話をしなくちゃいけませんね。
実は、道教が我々の日本人の日本の骨格ではないんよ、日本の国を作り上げて行く、基礎的な物がこの中国の道教なんだと思うんですよ。
その道教が、あの熊山遺跡の中にはまっていたと言う事を提唱したんですね。ちょっと普通だったら誰も信用しないと。従って、この熊山遺跡は道教という事になるということですね。まぁよくご存知のように、時間がありますからゆっくりやりますわ。要するにですね、熊山の中には石積みの遺跡がですね、３５、或は３７とかあるんです。この中でもひときわ大きいのがA,或はCとあるんですが私はAを捕まえて２４年間、研究したんですね。どうもね、山や後ろからね、「また来たの。」とそういう声がしたんです。普通、男性だったら「また来たんか。」ですが、「また来たの。」これは女性ですね。それで、これはひょっとしたら、日本人が１番興味を持っている卑弥呼ですね。卑弥呼がひょっとしたら寝てるんではないか。というな考えがひょこっとしましてね、私は卑弥呼に対する研究はしておりません。しかしながら、その中国の道教思想、これが遺跡の背後にあるということですね。知った時の驚き、嬉しさ、それと今日見えになっておられる大守先生の吉備津彦神社。あの吉備津彦神社のお手元にあります冊子がありますす、その中に古代太陽神殿の原点という事で私が書いている図があるでしょう。帰られてゆっくり読んでください。今、読まれてると話が聞こえんようになってしまう。まあ、そんな事でね、やっぱり私はね太陽の巨石文化の流入と古代太陽信仰というのを皆忘れてるんではないかと。太陽が東から出たら西へ出る。当たり前の話じゃという事ではなくてですね、年もいくほど、朝起きたら今日一日も無事に。日が沈んだら、ご苦労様といって年寄りの手を叩く姿をよく見ております。熊山遺跡がそういう事を私に教えてくれて、あなたも元気は良さそうだけれどもべらぼうに走るんではなくて、じっくりと腰を据えてこの熊山遺跡を研究しなさい。と、研究したら走り歩かずにじっとしときなさい。という事を教えてくれたのが熊山遺跡だったんですね。

熊山遺跡から出て来たものについての色々な考証、自分なりの思いを書いた本を６冊出しました。ありがたい事に、自分の事をあまり言ったらまた大守先生に叱られるかもしれない。私が最後に書いた本ですね、１９９１年の１２月２２日、しかも冬至の日に出版した本が、これが県立博物館と備前市にもありますし、岡山県下にはどこにでもあります。この本がありがたいことに、ハーバード大学の研究図書館にも入りました。で、入ったいう事は一体ほんならハーバード大学の研究者は手紙もくれませんわな。あなたの研究は素晴らしい、と手紙でもくれたら、もう私そこらじゅう飛び歩くだろう。そういう事もありましたが、要するにいかに太陽というものが大事だろうと。　で、私はいつか書いた著書を吉備津彦神社の宮司さんにお渡しして、もしよろしかったら皆さんにお分けしください。とそこへ訪ねてきた同志社大学の「おがわこうよう」先生の弟子で、今は就実大学で教授をやっておられているカ・ジョンソンという朝鮮の方なんですが、その方がおがわ先生の手紙を持って来られて、それについて私は、ただ単にこういう研究したんでって、たいした事はありませんと。ところが、その小川先生が、私が次の本を書く時に「はっかんをよせて」という言葉をいただいたんです。それをちょっと読んでみたいと思います。

『太陽と巨石文化の流入と古代太陽信仰。太陽は、毎朝東の空に姿をあらわし、中央にのぼり西の空に移り、やがて姿を消す。姿を消すが地球の自転を説いたコペルニクスは当時の宗教家から批判され迫害を受けた事も周知の事実である。人類の多くは地球が円球であることを知らなかった。太陽は大地のあるところから出現し夕方には地中に姿を没する事になる。やっぱ太陽さんも1日中照ってますから疲れるんでしょう。それで夜になると地中に潜っていく。そういうような事なんでしょうか。明日もまた太陽は姿を見せるのか。もし太陽がなくなったらどうなるのか。昔の人間にとって太陽の存在は、謎でありしかもなくてはならない大いなる神である。とつまり太陽がもし太陽の神だったと。その太陽の神がどこに現れるのか、それが太陽巨石文化、つまり磐座という事ですね。

磐座というのはいろいろな形があるんですが・・・原始、古代における太陽信仰というのは、太陽そのものの存在への切実な祈りから成立しておるんですね。だから夏至から冬至。そうすると太陽は60度の角度でもって宇宙をぐるぐるしてるんですね、あ、ぐるぐるじゃないですね。地球がぐるぐるしてる。で、60度の中の太陽の動きを誰がどうやって捉えたのか、そこが重点だと私は思っております。だから夏至から冬至に至る太陽の軌道に敏感であったと。これすごく敏感だったんです。東経と北緯の動きがあるんですけども、太陽が出なかったら古代の人たちは生きた心地がしなかったでしょうね。太陽が出るとあぁ、良かったと。これで私は今日も頑張れると。昔から言うでしょ、今は電気がありますが、昔の人は恐らく夜があけると目を覚まし、暗くなれば寝て一杯飲んでね。お酒を飲むという事は、太陽がいなくなって寂しいその寂しさを紛らわすために飲む。これがお酒でしょう。これは私の考えですけども、そういうことで太陽巨石文化の成立を考える我々は過去の太陽の歴史の中で見直していく必要があるんですね。』

この文は私が執筆した１９９１年１２月発刊、本書に寄稿いただいたおがわこうよう先生の言葉でご紹介しときます。

それから次に木点の１２宮という、これはここに書いておりますが、ゆっくり読まれたらわかります。早く読むとね、どうしても忘れる。何で私はこんな事するんだろう。線ばっかりがあっちこっち・・・やっぱり古代人が太陽にものすごく敏感であったという事はお解りでしょ？今の人は太陽より月が欲しい。あんまり大事にしてないね。特に漁師さんはお月さんを大事にしている。これは潮の満ち引きに関係がある。大きな月が出ると今日は沖に出られんから家におられえ。今度、ええ形のお月さんが出たら電話するから出て来られ。出て来たら車エビでも何でも取れると。そういう宇宙との交信というのはすごくやっているようですね。

それで後はこの図ですね。太陽巨石文化の発生分布。それから、遺跡の方向性それから図のＢというのは、たかしまにある。これは皆さん１度行きましょう。素晴らしい遺跡がある。それから図のＣというのはですね。これは大森先生のご先祖様がおられました、、、、ここに竜という神を奉ってます。そしたら６月２２日に、出る太陽は何の太陽です？冬至？夏至？？これがわからんとは。私、言ってないかな。これ夏至なんです。夏至の太陽はものすごく照るんですよ。だからみんなが病気になるんです。それから冬至ですね。冬至になってくると太陽が弱くなってくる強くなったり弱くなったりする太陽。うまい具合に人間を操ってますなぁ。そして人間もついていく。それで、これが冊子の中にちゃんとありますから、私が説明せんでもいいんですけど、この線上に熊山があるんです。はっきり言いましてね。で、北と南、私もわからなくなるんです。それで、ついでの事なんで充分話しがしとるようで抜けてるとこがありますね、やっぱ。やぶさめって知ってますか？これはね、吉備津彦神社があるとしましょうか。これが本殿、こうなってますね、鳥居がね３つあるんですよ。まず、こっから入るんです。ここから入る時に皆さんは夏至の太陽を背中に受けて入ってくるわけです。それで、これでここにこういうね的を作って馬で走ってバーンと撃つんですけど、これが何かと言いますと四角、これが地、丸はこれは天。これは天と地のね、天と地で弓でやるんですね、収穫した物は守れるように自分たちの生活が安定するようにと、天、地の神これを守るための儀式がやぶさめなんですね。１度、１０月のお宮のお祭り（第３の日曜）、ぜひ行ってください。現在の宮司さんがお見えになるはずなんですが、

宮司さんの顔を見ると、なるほどなぁというような顔をしておられます。私もね、実はねこういう風にニコニコ笑いながら腹をたてないで話をできるようになったのは事務局長のおかげだと思っております。今日はね、持ち上げておりますよ。どこかで落とされますよ。

で、この図を見たらわかります。吉備のなかやまには２つのお宮があるでしょ？どちらも、吉備という大神を奉っている。かたや彦神社と、あそこには今、吉備津彦神社の参道、ちょうどやぶさめをする所を通りますとね、彦様、ひね様というトイレがあります。何であれ、彦とひねと書いたんですかね。まあ一緒にはできませんから書いたのかもしれません。まあそれはいいとしてですね、私は色々と、これも熊山の研究の過程でこれを知ったんですけどね、全国でも少なくとも夏至の太陽を受けてね鏡に太陽が入る。それを巫女が拝む。これはやっぱり中国の道教思想だと思いますね。そういう仕組みの神社が、まったく・・・私は天照大御神が日本の最高の神である、と確かにそれ、　あ、ちょっとこれは余談ですが天照大神は男神ですか女神ですか。私もどっちかわかりません。ようわからんもんがどっちか言う方がおかしいわ。とこらがあれは男神だという人もおられますが、ある人は、あれは火見子だと言うんですね。火を見る子で。それはいらんことになるんですが、一応、私の話は収着するんですが、最後になりますが、ここにかけなかったんですが、皆さんに見ておいた方がいいなという磐座を紹介しておきましょう。

それは、まず大安寺という所知っておられる人、手を挙げて。はいはい、それから天神山ですね。それから、日本では４番目か３番目かの大きさで造山古墳。岡山の新庄というところにありますね。私、絵をかくのが好きなんですけど今日はかけませんわ。あがっとるんでしょうかね。こうしんやまと言うの知っとられる人手を挙げて。皆さん、よいう行っとられるんですね。山登り好きなんですね。こうしんやまとつくりやま古墳はどういうふうに結ばれていると思います？南北、ぴったりと結ばれております。そこまで言うたら熊山もですね、丸山古墳、熊山も南北ぴったりなんですね。まあ、まっすぐ線を引きゃあどこへでも当たろうというのではなしに、これは、つまり円墳で、これは後墳なんですね、後墳と円墳ですね、これはまるいんですわ。円と後ですから、これは地方でしょ、こちらは天でしょこれが中国の道教思想なんですわ。こういう事をですね、私いかに力を入れて言うても学者はそうかとは言いません。そりゃ、学者には学者の考えもあります。私はあえて学者とケンカをしたり諍いを起こすつもりはありません。ただ、私の考えも聞いてください、ということですよ。てんげんちほうのりっていうのがね、大変なんですよ。これからも私の残る日数、天が呼ぶまではこの事については絶対、外しません。とことん無理していきます。そして、私はいつかは卑弥呼に会いに行きたいな。と、ちょっとこれは、、、笑　　つまり、こういう事をいにしえの人々は平気でやったんですね。大きな石を山に持ち上がったりね、海辺でそこで築いたり、そんな事したわけがない。と言われるんですけど、実際にしてるんだから仕方がない。私が考えたんですけど、山を削るんですね、削ると高い山程ね岩がこうね。だいたい標高の、、熊山は海抜５８０ですが、普通の磐座があるところは２００ないかという所がたくさんあるんですね。よー見んといかんのですよ、だけどねあんまり見ると目つきが悪くなる。あの人は何を見ようんじゃろうかと。確かにね、山に入ったら素晴らしい石がありますよ。大安寺、天神山、それから高島それからもう１つ、これを言わんとはじまらんのですが、児島湾にやっぱりたかしま言うのがある。

児島湾の高島はね、これが向こうの対岸としたらね、日本列島のような感じになっとるらしんですわ。これは昔から神武天皇が祈りをしたとあんな小さな場所にですね何千人来て、入れるんだろうかと。まぁわしらは入るからお前らは海で遊びょーれとでも言われたんかもしれませんな。まあいづれにしても、そういうような仕組みが残っております。悲しいかな、これはある人にぶち壊されて、中から色々でてきたんです。で私は何遍も歩いてね、色んな物を拾いました。拾ってはね。岡大に行ったり理大の方に行ったんですが、これは江戸時代の器じゃがと言われて、全然時代が違いますからね、まあそういうような事をして今日はここに来ました。

ほんとにね、もういい加減には脱線せずにすぱっと決めるだけ決めてぱっとやめ！とそのような話が向こうからぴーと入るんですが要するに、人のやってないことをやる。良いことだと思います。それから人に喜ばれる事をやれる事が幸せなんですね。そういう事を覚えておいて。私は熊山遺跡に出会った事をよかったなと思います。　以上です。

若狭会長の熱演

謎の熊山遺跡　国指定史跡

設立記念講演　当日のレジメ

見直される地域と歴史の絆　　「ソーシャル・キャピタル」の観点から

講師＝大守隆　吉備津彦神社社家（大藤内）第 79 代当主　現在APCA経済委員会議長

平成 21 年 5 月 30 日　古代先史研究会（於備前市）

1. 時代の変わり目の可能性

グローバライゼーションは不可避だが

産業革命以来の方向が転換している可能性

生産と生活の分離、規模の経済、匿名性の増大

何故か？

技術の変化：情報化の進展、ＰＣの発達、

価値観の変化：所得の増加、労働時間の減少、人間観の変化（損得からの離脱）

安定性志向：不況の反省

2. 世界的に注目を浴びる「ソーシャル・キャピタル」

道路、港湾、空港などの社会資本ではない。キーワードは、一般的信頼、ネットワーク、互酬性、帰属意識など

社会がまともに機能する基盤（会社組織でもそう）

米　国：古き良きアメリカへのノスタルジー、「一人でボーリング」、家族の崩壊

欧　州：疎外された移民

途上国：最新技術の消化には社会的背景が必要

さらに最近では、地域活性化、技術革新（クラスター）との関係が重視されている。

3. 日本での見直しの背景：昔はこの面で豊かだったが・・・

国際化：カネや技術の国際化が進む。日本らしさとして残るものは何か？

高齢化：高齢者は生産には直接寄与しないが、

ソーシャル・キャピタルの面で貢献する可能性（江戸時代はご隠居社会）

不況：会社への帰属意識の弱まり

4. ソーシャル・キャピタルと地域・歴史

①市場と規制の組み合わせ（欧米流経済学の発想）しかし、

規制当局は時代に遅れる

技術革新のため、個人の利益と社会の利益が大きく乖離する「機会」が生じた

②．社旗の成熟

人は損得を基準に生きるのではないし、そのように考えて社会システムを設計すべきでもない。

③．ソーシャル・キャピタル

行動基準の形成に大きく影響

④．地域クラスター

革新的な技術の発展の基礎は、意図的に形成された研究者集団ではなく

地域的な勉強会のようなソフトな組織

高齢者の役割、暗黙知（失敗の経験）、仲間による刺激とヒント

相互信頼（と監視）による自由な情報交換、

⑤．文化の価値の見直し

モノへの需要への充足　　文化の元をたどると地域と歴史　共生概念の変化　　背景には自然（入会地、里山、鎮守の森、神様）の変化　　防災、防犯、子育て、介護

⑥地域特性の変化は何か？

自然とソーシャル・キャピタルと伝統の３つではないか？　経歴とＳＣの資料を付けよう　具体的な提言が欲しい

大守氏講演内容

皆様こんにちは。ご紹介にあずかりました大守　隆と申します。今日、私は若狭先生の前座を務めさせていただくことになりました。どのようなテーマでお話するのがいいかということを考えましたが、私は今、APEC の関係の仕事をしておりまして、そこで日頃考えていることと今回の研究会との接点のようなテーマをお話させていただきたいと、思っております。

レジュメを前にお配りしておりますけども、それに入る前に、まず、APEC とは何かということについて、やや大袈裟な話になったり、宣伝にもなったりしてしまうかも知れませんが、お話をさせていただきたいと思います。APEC とはアジア太平洋経済協力のことです。太平洋をとりまく国々、国というと差し障りがある場合には、「経済」という言葉を使いますが、それが２１個参加しているものです。２１とはどことどこなのかについてまずご説明しますと、日本、中国、韓国、台湾、香港、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリンピン、ブルネイ、シンガポール、ベトナム、パプアニューギニア、ここまでが太平洋のアジア側、それに加えて、オーストラリア、ニュージーランドそして、ロシア。太平洋の向こう側では、カナダ、アメリカ、メキシコ、ペルー、チリ、これで２１になります。これが集まって、色々な議論をすると、そういういわば国際機関のような協議体でございます。

APEC の一つの特徴は、毎年持ち回りで議論をするということで、今年はシンガポールで一連の会議をやります。そして来年は日本でやることになっております。どんな議論をするかということですが、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが「ボゴール宣言」というのが大分昔に出ました。その中に、アジア太平洋地域で貿易や投資の自由化をしましょうという目標が書いてあります、そして、先進国にとってその自由化の目標年は２０１０年であるということも書いてあります。途上国はもうちょっとと後ですが、日本で APEC が開かれる来年は、先進国の自由化の目標年ということで、大きな節目の年です。これから先、我々はこの地域をどういう方向をめざしていくべきか、ということを来年打ち出さなくてはいけないということです。

ご存知かもしれませんがつい最近、来年の首脳会議は横浜でやる、といったように、開催場所についての情報が発表されました。さて、問題は場所より中身なわけです。で、ここから先は私個人の考えも含めてお話を進めさせていただきたいと思います。今、外務省や経済産業省などと議論を始めているわけですけども、新しい方向性を日本がアジアをバックにして打ち出す、そういう時期にきているのではないかと思います。まだ模索の段階ではありますが、１つ考えられる方向としては、最近、大きな不況、１００年に１度の危機と言われている深刻な危機がありましたが、そういうことの反省も踏まえなくてはいけないと思います。しかしより長い目で見ると、アジア太平洋の地域というのは、急速に貿易も増えてきて、お互いにそのメリットを享受するような形で発展してきたと、そういう面も積極的に評価していかなければならないと思っています。しかし、国際化が進む中で、海外要因の影響がだんだんと重要になってきたという側面もあります。特に多くの国にとって今回の不況というのは海外から来ています。国際化のメリットをいかに国民全体が享受し、一方で、海外から来るショックの悪影響を緩和していくか、ということが一つの大きな課題であると思います。

こうした問題意識の中からインクルーシブ・グロースという概念を主張する人もいます。これは、発展に取り残される人々を作ってはいけないという発想です。そこことはもちろん重要なのですが、私個人は、もう少し前向きなイメージが欲しいなと思います。すなわち単に成長や国際化の成果をどう配分するかといった問題の捉え方だけでなく、しっかりした成長を実現したり、国際分業のメリットを享受しやすくしたりするためにも、社会全体で発展していくことが重要ではないかという側面も強調していく必要があると思います。これと密接な関係があるのが、最近、世界で注目されている「ソーシャル・キャピタル」という新しい概念です。今日はそのことについても詳しくお話をさせていただこうと思います。一ツ橋大学の名誉教授の宮川公男先生という方と私の共編で「ソーシャル・キャピタル」という本を東洋経済新報社から 2004 年に出しました。その時に、東洋経済新報社の引退間際の社員の方が、最後の仕事として利益を度外視して良い仕事をしたいというお考えで事務方を引き受けてくださりました。ところが、幸いなこの本は地味な内容にもかかわらず予想以上によく売れました。時代の流れがこういう方向に向かっていることを示唆しているように思います。このソーシャル・キャピタルというのは、今日のテーマの「地域と歴史の絆」というのと、かなり密接な関係があると思います。

それでは、レジュメに則してお話したいと思います。

少し大袈裟な表現ですけども、我々は時代の非常に大きな変わり目にいるのではないかと気がしております。今回の経済危機は、よく１００年に１度と言われておりますけども、１００年に１度ではなく、もっと大きな意味での時代の変わり目にいる可能性があるのではないかと思います。別の言い方をしますと、金融危機というの、何年かすると次第に収まってくると思います。もう既に少し収まり始めている兆候が見えておりますけれども、それにあまり目を

奪われていてはいけなくて、もっと大きな時代の転換が起きているのではないかということです。それはどういうことか、そして、いつ以来なのかといいますと、産業革命以来ずっと続いてきた方向が逆転し始めたのではないかと思います。具体的にはレジュメに３つほど書いてございます。１つめは、生産と生活の分離というのが産業革命以来のトレンドであったのが逆方向に向かい始めた。ということです。昔は、生産の場が家庭の中にありました、今でもアジアの一部の地域に行きますとそうなのですが、家庭の中で鶏とか犬とか豚とか一緒に暮らしており、食糧生産が家庭の中で行われています。工業も産業革命以前は家庭内で手工業の形で営まれることが多かった。それが、大規模生産の時代になり、生産は工場で行われるようになり、だんだんと生活の場から分離されてくるようになった。そういう方向がずっと続いて発展してきたのですが、最近になって、生産活動が必ずしも場所を選ばなくなった。小さなオフィスやホームオフィス、あるいは自然豊かなところでも仕事が出来るようになってきているというようなことが起きております。その背景には「規模の経済」の追求が一段落したことがあると思います。規模の経済というのは経済学の概念で、要するにモノは大規模生産の方が安くできるから、大きな工場を建てて、そこで作るのが良いという考え方です。この流れが止まって、今は小規模、多品種で生産した方が良いのではないかという考えも強まりつつあります。

これと似た話ですが、アジアの他の国と違って、日本では世界一、アジア一といったことがもてはやされた時代が２０年前くらいに終わってしまいました。世界一高い電波塔とか、世界一速い鉄道とかを競うことをしなくなりました。その代わり、いかに質の良い物やサービスを提供するかという方向に変わってきているのではないかと思います。３つめの点も、上の二つと関係しています。これまでは匿名性がずっと追求されてきました。誰がやっても同じようにできるようなマニュアルが求められてきました。そして、大都会の中で知らない人の中で生活する人も増えてきました。こうした中で経済活動は盛んになってきたわけですけども、最近はその方向が逆転し始めました。すなわち、個性が重視され、誰が作っているかが問題にされるようになってきました。農産物でも、作られた方の名前が入っているものの方が良く売れるようになりました。しかしこの流れは一体、どこに行き着くのかはわかりません。

次にこうした転換の背景を考察してみましょう。１つは技術の変化で、通信技術が発達したり、輸送費が他の費用に比べて安くなったりしたために、必ずしも物理的に近くにいなくても情報やお金のやり取りなど色々なことができるようになったことがあげられます。

これに加えて、需要側の変化も重要だと思います。すなわち、人々が豊かになり、価値観も変わってきて、モノに対する需要よりもサービスや文化への需要が重視されるようになってきました。一方で、人による差はありますが平均的には労働時間が減少してきました。余暇が大分増えてきて人生を充実させるために使える時間が増えてきたということも背景にあると思います。さらに言えば、安定性への志向が強まったことも挙げられます。不況の反省ももちろんありますが、豊かになった分だけ、落ち着いて地に足をつけた形で仕事をしたいという気持ちが強くなったと思います。また、高収入を求めて働くよりも、何か意味のある仕事をすべきではないかといった考え方が強まってきたといえると思います。

こうした中で、伝統的な経済学も反省を迫られています。伝統的な経済学というのは、ある意味で単純な人間観を前提としています。これは経済学者の人間理解が浅かったというよりも、そういう前提を置かないと理論が構築しにくいといった理由の方が重要だったと思います。ひと事で言うと「損得」を基準として人間行動を説明しようとしてきました。でも、どうもそうではないのではないか。とこういうことが見直されてきているわけです。 私どもの日頃の行いや、親から受けた躾などを考えてみてもやはり基本は損得ではなくて善悪であったと思います。ある行動をするべきかどうかを判断する際の基準は、それが良いかどうか、という善し悪し、あるいは美しいかどうかであって、損得ではないと思います。

最近の発達した経済学では、ゲーム理論という分野があって、人間行動をもう少し複雑に、あるいは長い目で見るようになりました。行動を説明する際に相手の反応や相手からの信頼を勘案するということです。しかし、この発送の基本はやはり損得です。あえて言えば打算あり、その観点が長期化したにすぎないと思います。私は、こうしたアプローチには疑問を感じています。人々の行動の基準は、社会の一員であるということに根付いているのではないかと思います。そこで、いよいよ今日のメインテーマの一つであるソーシャル・キャピタルの話に入っていきます。

まず、ソーシャル・キャピタルとは何のことかをご説明します。昔から日本には社会資本という言葉がありますが、これはそれとはちょっと違うので、誤解を招きやすいのです。実は中国では、社会資本という言葉を使っているようなのですが、日本では二つの言葉は区別しています。どう違うかと言うと社会資本とは、道路とか公安とか空港などの公共事業の対象になるようなものです。それに対してカタカナで言うソーシャル・キャピタルというのはもっと人間くさいものであって、「信頼」、「ネットワーク」、「互酬性」、「帰属意識」などのキーワードで説明されるものです。

まず「信頼」についてご説明しましょう。レジュメには一般的な信頼と書いてありますが、一般的なというのが付くのはどうしてかと言いますと、例えば大学の同窓やクラスメートだった相手を信頼するというのは一般的な信頼とは考えません。それは同級生だから信用できるというように根拠のある信頼であるからです。では一般的な信頼とは具体的にどのようなものかといいますと、特に繋がりの無い人に対する信頼です。例えば、たまたま道ですれ違った人、あるいはたまたま電車で隣に座っていた人に対する信頼です。もし電車に乗っている際に、何か事故があったとしましょう。そのときに隣に座っていた人と協力して問題を解決していくような信頼の基盤がどのくらいあるか。ということです。もちろんお互い知らない間柄ですけれども、その社会の中で培われている基礎的な信頼感がどの程度あるかを問題にしているのです。この意味での信頼の度合いはかなり国によって違います。海外の論文に極端な調査を行ったものがあります。お財布の中に１００ドル程度、１万円くらいのお金と連絡先がわかるものを入れて、一定数を町中にわざと落としします。そしてそのうち何個の財布が戻ってくるのかというのを国によって実験をするわけです。そうすると、結果は国によってかなり違って、北欧諸国ではかなりしっかり戻ってくるという結果になりました。そして、そういう国では一般的な信頼が高いとか、さらに経済成長率も高いという議論がされています。

もう一つのキーワードは「ネットワーク」です。これは、人がどれくらい、どのようなネットワークに入っているかということです。しかしなかなか計測が難しい側面もあります。ネットワークにはいろいろなものがあるからです。趣味のネットワークもありますし、付き合いや義理で入っているネットワークもあります。さらに、会員といっても、どこかのお店のポイント会員っていうのも一応会員です。どれだけ縁のあるネットワークに入っているかというのは、なかなか把握するのが難しいのです。また、そうしたネットワークでどれだけ活発に活動しているか、いわば濃度も重要ですが、これも簡単には計測できません。しかし、義理で始めた付き合いでもそこから縁が生まれることもあるのは皆様もご存知のとおりです。

それから「互酬性（ごしゅうせい）」ということもよく言われます。互酬性と言うのは難しい言葉で、お互いに協力しあうという意味なのですが、単に貸し借りというのとはちょっと違います。短期的な貸し借りですぐにお返ししたり期待したりするというよりは、そのネットワークに入っていれば長期的には自分も裨益するという程度の緩い意味で、また長期的な意味での互酬性です。

次は、「帰属意識」です。グループまたは社会の一員としての意識です。社会というのは、国の場合もありますし地域社会の場合もありますし、企業の場合もありますし、趣味のサークルの場合もありますけど、そういうものに対する帰属意識がどれくらいあるかと。いうことです。このように、ソーシャル・キャピタルに関する代表的なキーワードを見てきましたが、こうしたことが、社会がまともに機能する基盤としてに重要なのではないかということでこの概念が世界的に注目を浴びているわけです。

別の観点からソーシャル・キャピタルを説明してみましょう。会社の例を考えてみてください。従来、経済学では、生産水準というのは、生産要素の投入量に依存すると考えてきました。生産要素とは労働や資本や技術です。どれだけの人材がいるか、機械がどれだけあるか、技術水準がどれだけ高いかということで生産水準が決まると考えてきたのです。しかし、組織で働いた経験のある方なら、大事なのはそういうこともあるけれどもやっぱりチームワークではないかとすぐに思い浮かぶと思います。いくら優秀な人材が揃っていても、みんながお互いに協力的でないような組織、あるいはうまく運営されていないような組織では、折角の優秀な人材も腐ってしまう。皆がやる気を出して協力すれば、生産性が何倍も違ってくるのです。これと同じことが社会全体についても言えるのではないかということです。

ここで少し海外の話をしたいと思います。先ほど世界的にソーシャルキャピタルの議論が盛んになってきたということを申し上げましたが、その背景は実は地域によって違っています。まずアメリカです。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんがパットナムという人が「一人でボーリングをする」という本を書いて、これが大変有名になりました。アメリカでは、昔は地域にボーリングのグループがあって、皆で楽しく行ったのだけども、最近は一人でボーリングをしに行く人が増えてきているということを採り上げた本です。古き良き時代のアメリカが崩れてきている。そういう警告の書であったわけです。その背景には、家族や地域社会の崩壊やテレビの影響といった議論がなされているわけです。一方、ヨーロッパでソーシャル・キャピタルが議論されている背景には、移民の問題があります。例えば、イギリスの北の方に行きますと南アジア系の移民の人たちがまとまって暮らしている地域があります。相当所得水準が低くて、若い人が希望を持てず、生き甲斐を失っていて、犯罪のリスクも高いという、憂慮すべき状態になっていました。そういう人達をどうやって、社会の中に受け入れて行くかが課題になっています。生き甲斐を持って前向きに暮らしてもらうにはどうすればいいかということが、政治的にも大きな問題になってきました。こうしたことから、イギリスやフィンランドは、統計指標の面でもソーシャルキャピタルを非常に重視しています。

もう１つは途上国です。世界銀行という国際機関がこの分野の研究をリードしています。その問題意識はどういうことかといいますと、途上国に一生懸命援助しても、どうも身に付かない場合が少なくないということがわかってきたことがあげられます。
その背景をよく調べてみますと、最新鋭の技術をもった設備を導入してあげても、それが必ずしもうまく運営されない。運営するためには、例えば地域社会内部の協力が必要です。すなわち、お互いに分担体制を組んで、自分の分担をちゃんとやる、といったように、導入された設備を使う側の体制が整ってないと、いくら良い技術であってもそれを消化できないということがかなりわかってきました。
この場合、２つ道があります。一つは、そういう最先端の技術ではなくて、もうちょっとその地域に適した技術、すなわち使い易い技術を移転する方がいいという議論があります。例えば井戸堀りの技術です。人もう一つは、社会の方に働きかけて新しい設備でも運営のできるような社会に変えて行ったほうがいいのではないかという道です。こうしたことを巡って研究が進められています。

今度の経済危機で貧困と言われる人が増えており、社会全体で助け合って行くことの必要性が増しています。これは、特にアジアの国でも非常に大きなテーマになっています。最初に申し上げたAPECでも経済発展のための社会的基盤といったようなテーマを新しい方向性として考えるべきではないかという議論が盛んになっていきています。また、最近では、ソーシャル・キャピタルと、地域の活性化や技術革新といったものとの関係が世界的に注目されています。地域の活性化という観点では、活性化している地域について、何故うまくいっているか調べてみますと、良いリーダーがいるわけですね。しかもリーダーが１人でやっているわけではなくて、まわりに理解者がいて、これは行政も含めてですが、そういう中でリーダーが充分に活躍をしている。そして自発性を重視した開放的なグループがあることも重要です。開放的ということが１つの重要なポイントでありまして、排他的なグループだとメンバー同士のコミュニケーションはあるのですが、社会の中での発展性に乏しくなってしまうのです。開放的で、来るものは拒まず、そして仲間の多様性も尊重しながら発展するグループの方が発展的であるということなのです。それからもう１つは何らかの地域特性を背景としているもの。そういう集団が地域活性化にとって非常に重要だということがわかってきたのです。技術革新について、これもいろいろな例がありますが、地域から出てくる技術も、あるいは企業で開発された技術でも、開発のために意図的に形成された研究集団から生まれたものもありますが、サークルとか勉強会といったようなよりソフトなもの、いわば「場」から生まれたものが多いことがわかってきました。
例えば、大企業で、こういうものを開発するからといって、スタッフを集めてみてもなかなかすぐに画期的な商品は出てこない。どういう所から出て来るかというとサロンみたいな場から出てくることが多い。サロンには高齢者がいて色々な幅広い経験を持っている。経験の中で大事なものは試行錯誤して失敗した記憶・経験なのです。成功の経験は記録されますが、失敗の経験は記録されず、携わった人の頭の中にしかないことが多いからです。

ところが、かつては失敗した試みであっても、状況が変わっていることもあるのです。技術が新しくできたりして、昔ぶつかった壁も今は崩れているかもしれないのです。そうした点に関するヒントが得られたり、また志を同じくする仲間がいたりすることによって、やる気が出てくる。そういうようなことが非常に重要であることがわかってきたのです。「場」のもう一つの重要な機能は、準秘密情報の交換と育成です。相互信頼がありますと、これが可能になります。どういうことかといいますと、新しいアイデアを持っている人というのは、そのアイデアを何とかして実用化したいと思っている一方で、せっかくのアイデアを人に取られてしまうのではないかということも心配しているのです。ところがサークルというような相互信頼がある場では、何人もの人が情報を共有します。すなわち何月何日にこの人がこういうアイデアを皆さんに提供したということがわかっていると、やはりそう簡単に横取りして行くということにはならない。一人が出したアイデアを皆で育てたり、あるいは別の人のアイデアと組み合わせて、芽を伸ばしたりしていける。そういうことなのです。

さて、日本についてはどうでしょうか？　日本でもこうしたことが最近かなり注目を浴びてきています。昔の日本では地域のネットワークというのは非常に濃密で豊かだったのですが、都市化や国際化の進展の中で、それが希薄化してきました。こうした中で、日本らしさとして何を残せるかということが問題になってきています。しかし、最近新しい動きも感じられるようになりました。まず、人口が高齢化していきますと、これ以上、ベビーブーム世代が大都市に向かって動くということが終わってきます。そして職場から卒業した高齢者が地域でどのような役割を果たしていくのかということが大きなテーマになってきました。人口の高齢化に対する従来の考え方はかなり消極的なものだったと思います。つまり６５歳以上の方々の人口に占める比率が何パーセントかを問題にして、それが上がっていくから日本の産業の活力は下がってくるなどといった論調が新聞などで盛んに展開されてきました。私はもうちょっと積極的な評価もできるのではないかと思っています。

それは端的に言えば、ご隠居社会ということです。これは日本の江戸時代にあったわけで、狭義の仕事からは引退するけれども社会的な活動、例えば地域の運営の活動はかなり一生懸命やられていました。また、文化活動も相当積極的にやられて、そういうことが江戸時代の日本の社会の安定性や文化的な豊かさに大きく寄与していた可能性があると思います。今の日本で、そういう芽がどのくらいあるか、と考えますと、潜在的にはかなりあると思います。問題はそれが開花するための場所やきっかけをこの辺で考えて行く必要があるのではないかということだと思います。

それでは、ソーシャル・キャピタルと地域や歴史との関わりを考えてみたいと思います。日本でのソーシャル・キャピタルは昔はかなり豊かなものがあったのですが、今ではかなり限定的なものになってしまった。普段の人との付き合いはどんなことをしておられますか、と聞きますと、ここにおられる皆様は違うかもしれませんが、大都市ですと、１つは会社の中での仕事が終わってから飲みに行くような付き合いの比重が多いと思います。しかし最近では会社もだんだん厳しくなってきていつ左前になるかわからない。或は、リストラされてしまうかもわからない。という状況になっています。また、会社の中でも正社員と非正規社員といったような、違いが出てきています。会社に対する帰属意識っていうのも、弱まっているのではないかと思います。

もう１つ、日本のソーシャル・キャピタルの大きな要素は子育てを通じるネットワークだと思います。これは今でも比較的健在でありまして、公園デビューという言葉が象徴的です。すなわち子供が育ってきてある日お母さんが公園へ連れてって、お母さんがお母さん同士のネットワークに入っていくのです。そして、小学校が始まりますと PTA とうより制度的なつながりが出来て行きます。しかし、生活環境の都市化が進んだり、私立学校が増えたりしていることもあって、子供達は昔のように帰ってきてランドセルを放り出してすぐ遊びに行くといったような濃密なネットワークは持ちにくくなっています。したがって地域の子供同士、子供を持つ人同士のネットワークは昔に比べれば多少弱体化してきています。

もっと昔を考えますと、かつては自然がソーシャル・キャピタルの背景として非常に重要な役割を果たしていたと思います。すなわち自然環境に大きく左右される農林業に必要な共同作業が強力な接着剤の役割を果たしていました。入会地があって、そこを管理するルールが整備されていました。こうした動きは明治の半ばに一番盛んであったようです。しっかりしたルールで、きちっと管理されていたようで、里山についても同様で、地域社会によって適切な管理がなされていました。しかし最近では非常に荒廃が進んでしまいました。私は自由貿易推進論者でありますが、林業はグローバルゼーションの最大の被害者だという印象は持っております。そしてさらに、「鎮守の森」というのがあって、そこに神様がいて、その神様は先祖代々みんなで一緒にお祭りをしてきたものでありました。これが共同体意識の要のような役割を果たしていたと思います。しかし時代が変わって、最近の都会では、農業活動や里山維持などの代わりに、防災、子育て、老人の介護等がソーシャル・キャピタルを支える主な要因になってきたと思います。

全体としてみれば、こうした変化はどちらかというとソーシャル・キャピタルを弱体化させる方向に作用すると思います。しかし最近になって文化とか伝統というのが新しい要因として再び重視されてきているのではないかと思います。そして文化の元を辿るっていくと地域に根ざしたものがあって歴史と関係がでてきます。地域の人々は歴史と文化を共有していて、その中から新しい産業の芽が出て来ることもあります。また伝統的な祭りも、再び注目を集めております。例えば大阪のだんじり祭りに関して行政が有識者を集めて研究会を作ったとのことです、

また、私が APEC の前にやっていた仕事を通じて認識を新たにしたことがあります。日本に投資をしている海外の投資家を訪ねて行って日本経済に関して説明をする仕事をしていたのですが、そうした投資家の方々が何故、日本に投資をしているかということです。もちろん、日本担当ということですから、日本人がそうした仕事をされている場合もありますが、そうでない方が、何故、日本関係の投資業務をしているかということです。私の印象では、日本の魅力、特に文化の魅力が大きいと思います。日本への投資の成果はそれほど良いものではありませんでした。日本株をみても 90 年代初めのバブルの崩壊からは立ち直りましたが、しかし、かつてのような勢いは戻らなかったのです。日本市場がアメリカ、ヨーロッパと並ぶ一大金融市場だった時代に戻るのではないかと、世界の投資家達が注目した時期があるんですがそうはならなかった。そうはならなかったにも関わらず、日本に興味を持っているのはなぜか、というと、やっぱり日本が好きな人が多いのです。すなわち日本株をやっていれば、一年に一回か二回くらいは仕事にかこつけて日本に来る機会があって、日本の歴史的遺産を見ることができますし、何と言っても日本のおいしい食べ物を食べられるということなのだと思います。

APEC も来年は日本で一連の会議があるのですが、かなり多くの人が日本は食べ物がおいしいから行くのが楽しみだと今から言っています。こうした文化的な魅力というのを育ててうまくアピールしていったら良いと思います。

最後に、少し恥ずかしいのですがせっかくこういう機会をいただきましたので、私自身の話をさせていただきたいと思います。先ほどご紹介いただいた通り、私の祖先は江戸時代まで代々吉備津彦神社の社家をしておりました。明治維新の時に、中央政府から全ての神社に役人を派遣して管理するということになったと聞いています。その際、下

っ端でよければ雇い続けてやると言われたようですが、私どもの先祖はそれに潔しとせず辞めてしまって、その後、かなり厳しい時代があったようですが、祖父が、昔屋敷が建っていた土地を買い戻しました。そして父は大学から東京に出てきました。

若いころは私にとっての岡山との絆というのは薄かったのですが、それでもいくつかの縁がありました。１つは、私の父方の伯母が嫁いだ先が、岡山市の郊外の昔から続いているお医者さんでした。９０代になるまで開業医をずっとやっていたのですが、彼のところに時々遊びに行って、古いご自宅を見せていただいたり、趣味で収集している備前焼を見せていただいきながら様々な話をお伺いしたりしました。この伯父は、とても教養のある人で、私は大好きでした。

もう一つの絆は、吉備津彦神社です。もちろん今でもずっとお世話になっています。その裏の山、吉備の中山と呼ばれていますが、その上の方に先祖代々の墓所があります。そして代々我が家に伝わっている古文書がひとかかえありまして、これをきちっと痛まないように保存していかなければならないということも私の役目です。それからもう１つ、少年団があります、吉備津彦神社に向かって左側に先祖が代々住んでいた土地があります。そこには昔屋敷が立っていて、一時期一宮役場として使われていたようです。その後空き地になり、現在大藤内広場といわれていますが、その隅のほうに何十年か前に建てられた建物があります。この建物は先祖とは関係がなく、祖父が買い残した部分を父が買い戻す際に上物として一緒に買い取ったものです。そこを FOS 少年団のクラブハウスとして使っていただいております。ご存知の方も多いと思いますけれども、FOS というのは、かつて岡山県で国体が開かれた際に岡山各地に作られた少年団です。中山地区にもそれが作られ、その拠点として、この建物を使いたいとのご要望がありましたので、どうぞ、ということで無償でお貸ししております。ただ、こうした地域的な活動は、段々と衰退してきて、岡山市で残っているのはここだけと聞いています。クラブハウスの存在が多少でも団の存続に寄与しているとすれば、嬉しいと思っています。なお、この少年団は時々、吉備津彦神社の清掃などもされていると聞いています。若狭先生にご指導いただく機会は吉備津彦神社の行事に参加する中で生まれたということでございます。

ここで話題を変えて、ソーシャル・キャピタルという概念と私の出会いについてもお話させていただきたいと思います。平成 12 年ごろ、たまたま海外の人から話がありまして、OECD（経済発展協力機構）とカナダ政府共催で面白い会議をやるが、アジアからの参加者がいない、日本の経験について話してくれないか。と言われました。じゃあ行きましょうというわけでカナダまで出掛けて行ったのです。私にとって印象深いのは、それが契機になって、平成１３年にコロンビアでのシンポジウムに参加したことです。ある日突然、コロンビアの貿易大臣とおっしゃる女性の方から役所に E メールが飛び込んできました。コロンビアで開くシンポジウムに出てソーシャル・キャピタルの重要性を日本の経験も踏まえて話をしないか。という要請でした。そこで、コロンビアという国について私なりに調べてみました。当時コロンビアっていうのは大変な国でした。天然資源には恵まれていてとっても良い国なのですが社会の中が割れてしまっていた。　麻薬を作って収入にしているようなグループがあって、それが非常に大きくなってしまった。その頃現地では誘拐事件が多発していました。行くべきか、行かざるべきか考えたのですが、まあせっかく声がかかったので行ってみよう。ということで思い切って行きました。そのシンポジウムに参加したスウェーデンの人が言っていたことが逆説的でいまでも印象に残っています。すなわち、これだけ多くの人が非合法活動に従事してしまうと、それを止めさせようと禁止するだけでは無理で、彼らの生業を確保してあげなければならない。といっても簡単に新しい産業は育たないから、結局は軍隊や警察で雇わなければいけないのではないか、と言っておりました。このシンポジウムで、私は社会がきちんと機能していることがいかに重要であるかをお話したのです。自分ではどうしようもない要因、例えば治安とか郵便物の行方不明などの要因のよって、事業が円滑にいかないことが多いような社会では、優秀な人はこの国を捨てて、先進国に行った方がのびのびと仕事ができるようになります。すなわち、ソーシャル・キャピタルが整っている国へ行って自分の力で仕事をするようになります。そういう優秀な人がぬけてしまうと、残された社会の機能はますます低下することになってしまいます。

レジュメの次のところに、やや大げさなことを書いてありますが、仕事の関係で 5 年くらい前から日本の代表として経済関係の国際会議に出ることが多くなりました、そこで日本の望ましいイメージはどういうものかということを私なりに考えるようになりました。従来の日本のイメージは、ODA のお金を出してあげるとか、先進国としていろいろ教えてあげようというよう、印象があったと思うのですが、そういうものを前面にだすべきではないのではないかと思うようになりました。そのようなものよりも、自然との共生の伝統とか、武士道的な精神とか、文化の豊かさとか、それからさっきソーシャル・キャピタルの話に出てきましたけどチームワークの精神とか、そういったものをもっと全面に打ち出していた方が世界に貢献できるし、良い印象も持たれるのではないかと思います。このことは冒頭申し上げた「時代の変わり目」の中で世界が模索している問題の答えとつながっているように思います。また、アジ

アの風土に根ざしたものでもあると思っています。後２、３分で私のお話は終わらせていただきますので、その後でこの点についてぜひ皆様と意見交換をさせていただきたいと思います。

レジュメには書いておりませんが、私もそれなりに齢をとってきました。若いころは、歴史はそう好きではなかったのですが、段々と、先祖は一体どういう生活をしていたのだろうか、自然とはどういう関わりを持っていたのだろうかといったことについて知りたいという気持ちが強くなりました。これは単なる知的興味というよりは、本能的な意識のように思います。

たまたま昨年、ふるさと納税という新しい制度ができましたので、新しい制度を自分でも体験してみたいと思って岡山市に納税をしてみました。それがきっかけとなって、岡山市役所の方と、かなり縁ができてきました。先ほどの少年団の方々や今回の研究会も含めて、岡山との関係も一層深まってきました。今後ともぜひ、この研究会に参加して、先祖が連綿とかかわってきたこの地域の歴史の解明にささやかながら貢献したいたいと思っております。非常に雑駁なとりとめのない話で恐縮しておりますが、地域、そして歴史について考えることはこれからの世界の大きな流れの方向と何らかの関わりがあるように思っております。そして、そのことが、日本がアジアや世界の中で貢献していく上での一つの立つ位置となっていくのではないかと思っていることを最後に申し上げて、つたないスピーチを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

大守氏　講演

熊山遺跡を見学

『私の熊山遺蹟考』

日本先史古代研究会　会員　若狭哲六（当会会長）

岡山県・東部（吉井川左岸＝東岸）の一角に標高508mの熊山がある。東西南北およそ7kmの広さを持つ山でもある。山頂には、国史跡「熊山遺蹟」がある。標高 350m 付近には、特に東西南北の山塊一帯から頂上にかけ大小の「石積遺構」の存在を知ることが出来る。中でも頂上付近西寄りの一角に五段（岩盤を含む）から形成されている「石積遺構」がある。この石積遺構は、昭和 31 年 9 月 27 日に国の指定を受けた史跡である。

熊山遺蹟については、以前、沼田頼輔氏（大正 14 年）と、永山卯三郎氏（昭和 5 年）に夫々（おのおの）遺蹟についての論旨がなされている。永山氏の論説発表より 8 年後、この遺蹟は地元の人士によって昭和 13 年6月 13 日（雨期）に発掘されていた。発掘より 12 年間、市井の人には知られなっかた遺蹟である。遺蹟は昭和 25 年京都大学の梅原末治氏によって調査が行なわれその結果が、昭和 28 年 7 月の「吉備考古」第 86 号で同氏の所見が述べられている。学会での発表は、梅原氏が最初である。同氏は遺蹟より取り出されたとする「三彩」のこ壷をもって考証に当たっている。次に奈良の天理大学参考館の近江昌司氏が「備前熊山仏教遺跡考」と題し、昭和 50 年。「天理大学報」第85輯によって発表している。遺跡についての考証は、梅原末治氏、近江昌司氏に二人である。

遺跡は ①経塚説 ②戒壇説 ③仏塔説 ④墳墓説と諸説が分々とされる中、最近では仏塔説が先行されているようだ。熊山遺跡に付いては、いまだ、その内容を知るものはいない。

私が、熊山遺跡を知ったのは昭和 59 年6月である。遺跡が学識者によって学会に発表されてから 32 年の後のことである。私の遺跡についての考察は、幸いにも学識者には全く知らされていなかった遺跡発掘によって取り出されていた「筒形陶製容器・小壷」の他、多くの遺物を地元の古老に見せてもらってからである。古老は、他に遺物を散逸さすこともなく、また学識者にもみせることもさせず 57 年間遺物を秘蔵していたのである。古老に会ってから遺跡に付いての自分の論究は日増しに高まり、遺跡についての論著を発表することができた。

○　古代国家形成のなぞ-熊山とシルクロード（昭和 62 年 5 月）発刊
○　先史日本の夜明・熊山と東西交流史　（昭和 63 年4月）発刊
○　先史日本の夜明・熊山で見つかった「石」と「鉾」　（平成元年 7 月）発刊
○　先史日本の夜明・世界史的に見た吉備・女王終焉の地熊山　（平成 2 年4月）発刊
○　先史日本の夜明・女王国邪馬台の謎に迫る・国指定＝熊山遺跡・鶴山丸山古墳発掘の真相　（平成 3 年 12 月）発刊

以上の論著は、国内では国立国会図書館・岡山県立図書館に収納されており、海外では、特に平成 3 年 12 月発刊の論著が①米国議会図書館に平成 4 年 8 月に収納され②米国ミシガン大学に平成 4 年 12 月に収納され③カナダトロント大学に収納され④米国ハーバード大学に平成 6 年4月に収納され、⑤中国社会科学院歴史研究所に平成 5 年 3 月に収納されている。

中でも特に論著が評価されたのは、「中国社会科学院歴史研究所」の所長李学勤氏であった。李学勤氏は、1993 年 7 月「中国歴史考古誌」に論著に対する所見をよせ、私の論著を広く中国の関係機関に示して下さった。

昭和 59 年より取り組んできた熊山遺跡である。すでに 26 年が経過した。市井（しぜい）の誰もが手がけなっかた遺跡である。今思えばがむしゃらに「目」と「足」と「耳」で捕らえた研究論著である。自説によれば、熊山遺跡は古代吉備を支配したと考えられる大首長の墳墓と考えられたのである。古代吉備の国は、太古より多くの渡来人にとって形成されていた。

今後は、これまでの自説の論著を見直す中で、新たな視点で遺跡を捉え、遺跡構築の意義に迫ってみたいと考えている。日本先史古代研究会の機関誌発行（創刊号）に稿うい寄せた次第である。終わりにあたり「謎の熊山遺跡」についての若狭（私家説）の研究が遺跡解明への手掛かりとなれば幸いである。　　平成 22 年 6 月

謎は誰が解きほぐすのか

備　前　焼　①土の章

日本先史古代研究会　会員　木村玉舟　（備前焼陶彫作家）

皆さん。こんにちは。私は山陽新聞社で陶芸を担当している、木村玉舟という者です。私の家は代々備前焼の窯元で、私で 17 代になります。本当は 17 代以上になるのでしょうが、お寺の過去帳がやけたとかで 17 代を名のっています。豊臣秀吉が、備中高松城を水攻めに来た時に立ち寄ったと聞いていますからだいぶ古い時からやっていたのだと思って居ます。

さて、備前は日本六古窯と言って奈良時代からずっと、窯の火を絶やすことなく現在まで続けてきた唯一の焼き締め陶の産地です。六古窯とは「瀬戸」「常滑」「丹波」「信楽」「越前」「備前」を言います。備前焼は古代の須恵器の系統を引くもので、鎌倉時代に這い入ってより実用的で耐久力を持つ日用雑器として誕生しました。備前の水瓶は水が腐らないとして重宝され、すり鉢・壷・甕が作られました。今では備前焼は健康増進陶器として日本全国に名を轟かせる様に成っています。例えば備前のセラミックボールですが大きさは直径 3cm 位の玉でこれを5個位ウオーターポットの中に入れて水を一昼夜張っておくだけでなぜか水が塩素臭いも無くこれでコーヒー等入れて戴くと本当に素敵なコーヒーが出来上がるのが不思議です。又この玉を炊飯器の中に 3 個ほど入れてご飯を炊くとやはりふっくらとしたご飯が出来上がります。又備前焼のビールコップでビールを飲むと他には見られない程の細かい泡が出て、その上泡が消えにくくなって夏などは本当においしく戴けますし花入れの花は普通のガラスの花いれより倍近く長持ちします。又、大きな備前焼の器の中に、安い普通の酒とかウイスキーを入れてコルクでふたをして 2 週間置いた後、味わってみて下さい。お酒はまろやかさを増し特級の様なおいしいお酒が出来上がります。又、お風呂の中に備前焼花入れ等・2～3 個入れて使うと 2・3 ヶ月たった頃アトピー性ひふ炎が軽くなったとか、はだが綺麗になって来たというデータも出て来ていますので備前焼は本当に現代人の久世主の陶器だと再確認させられて居ます。

さてその様な備前焼ですけれども昔から備前焼は一土、二焼、三作りと言う言葉が残っています。では如何、一土なのでしょうか。それは土（素材）だからです。今となってはこういう土は本当に手に入らなくなりました。お金を出しても買えない土、自分の足でかせで見つける土となってしまいました。

備前土の色の違い

山鳥の色が備前土の最高の物

私が今、使っている土は観音寺の土と下り松の土、それに牛窓の寒風の土と熊山（備前市）の土です。普通一般に使われている土は大ケ池の土、備前市内の到る所から出てくる、ひよせ粘土です。ひよせ粘土とは地球がまだ山と海だった頃、雨がどんどん降り続き川を作り海に泥、土を含んだ水がどんどん流れ込み、扇状地を作り、そこに細かい泥を何度も何度も積み重ねて有機物（原生動物・バクテリア）等を飲み込みながら出来上がった粘土のことです。こういう粘土ですから本当に粘りは日本でも例を見ない位粘く、手の中でぎゅっと伸ばせば、黒光りしながら金箔位うすく伸び皆さんが知っているものでたとえるならばガムの噛んだあとの粘さとバターをパンの上に伸ばす時の伸びやかさを兼ね備えた土だと思って下さい。例えば他の土だと、右に折り返した粘土を左に折り返すと土の粒子に亀裂が入り、ぽっくりと折れてしまいますが備前の土だと、そういう事はまず有りません。ですから備前の土では普通では考えられない程の形が作り出される事が出来るのです。

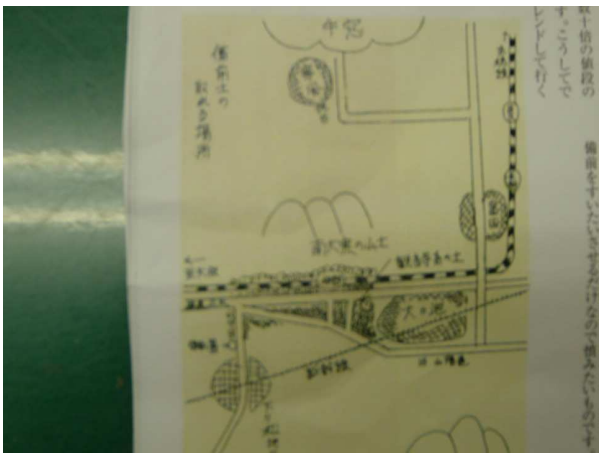
ただこういう土は作る時には最高なのですけれども土の中に含まれる成分から言えば問題が出てきます。それは鉄分 1.5%～2.0%マンガン・マグネシューム等、金属元素を多く含む濃い粘土なのです。それとやはり作るうえでこれだけ細かい粘土ですので、製品になるまでの収縮率といったら又、備前の土は他土に例を見ない程、縮みます。だいたい日本の粘土は1.2割から1.5割とされていますがこの「ひよせ粘土」は充分 2 割は、縮みます。ですからでき上がった物が乾く時に一度、窯の中で炎に当たった年度が石（陶器）になる時にもう一度、ですからよほどゆっくり慎重に乾かし、ゆっくりと焼成していかないとこわれる原因になってしまうのです。

それと先に述べました鉄分等の金属元素が問題です。だからこの土、一種類製作しても良いのですが、今流行（はやり）の備前の風

合いとも言うべき土味が出にくいのです。江戸末期から昭和 20 年頃までは備前焼が端正な形・陶器での金属写しが主流だった時期でしたのでこの土で制作した上にもっと鉄分の多い畠田の土を筆で塗ってブロンズ調に仕上げていた時期でした。畠田の土とはその昔、備前長船の刀匠が刀の波紋を入れる時に使った土だそうです。土の中の鉄分含有量は3.0%程有り、その為、耐火度が非常に低く、この土だけで成型すると、陶器が焼ける前にそのものが崩れ去ってしまうほどの弱い土です。あたかも食べ忘れたアイスクリームの様になってしまうのです。ですから「備前ひよせ粘土」で作った作品にこの畠田の土を塗る事によってブロンズ調の備前焼が一世をふうびした時期にはやりました。でも備前一千年の歴史から見るとやはり日本人、陶器でブロンズ調のものを作るより陶器なら陶器らしく素材の利点を大きく生かしてあたたか味のある素朴な土味を重んじた、日本人の心の奥底にある、畑・畦道・木の匂いが漂うような陶器がやはり備前焼だと考える様になって来ました。そうなると前に書いた様な粘土、例えば観音寺の土、下り松の土の出番成って来ます。でもその場所の土だからと言って又もや必ず良いとは言えません。ではどうすればいい土と悪い土の区別が出来るのでしょうか。それは土の色と味です。例えば観音寺の土色は山鳩の羽根の色が最も良いと言えます。少し紫かかった灰色です。また、下り松の土はうす灰色の入った白土がいいと昔から伝わっていますし、味の方は無味でなくてはなりません。舌をさす様なまた、くさい臭いのする土は全て使い物にならない土です。私もそれは最近やっと解って着ました。そしてやっとの思いで手に入れた土は、まず露天に最低5～10年さらし土殺しをします。そしてはじめてその土を使えるようになるわけです。その土も現代の土粉砕機などで砕くとせっかくの土の成分が死んでしまいます。

ではどうすればいいか。それはやはり木槌で土を何日もかけて砕いてフルイにかけ必要のない大きな石は手分けして捨てていきます。この段階で粉砕機にかけると粉砕機の鉄のチップが土の中に紛れ込んだ必要ない石をむりやり砕いて固いバリバリした砂が土の中に混じってしまいます。するとその土を混ぜる事によっておおらかなざっくりとした備前焼特有の土味が失われる原因になってゆくのです。ですからこうした手間・ひま掛かる作業を繰り返しながら土を作って行くのですから、信楽・瀬戸の土の数十倍の値段の土出来上がるのです。こうして出来上がった良い土を粘りの強いひよせ粘土をブレンドして行くわけですが窯詰めの事・窯の中の火の回り方の事を考えて土作りは始まります。たき口などの火の強い所は下り松の土や寒風の土など2割位入れますし、火の弱い所には観音寺の土を3割位入れるという様にその都度ブレンドして行きます。備前の土というのは田畑 10m離れた所でも成分が違って来ますし、同じ場所で掘っていても地下 1mの所と 2mの所でも成分が違います。原土の色も層になって別れていますので目で見ても一見です。ですからその都度、テストピースで土質を研究しながら備前焼作家は土を作って行くのです。

備前の土もどんどん掘り続けてやがて無くなって行くのではという心配が頭を横切りますが、やはりそれは切実な問題です。本当に最近備前の“いい土”が無くなって来つつあります。ですから備前焼作家の方々も備前で使える“いい土”を求めて日本全国さまよい始めました。私も旅のつれづれに各地の土を採取して日夜実験をくり返しています。例えば六甲山の土・これは鉄分が多すぎて、焼くと釘が熔けた様な鉄が噴出して来て使えません。又中国敦煌の土も使いましたが黄土系なので耐火度が低く物になりません。ではいい土はどこにあるのか、まずまず使え土・それは私の場合、愛知県長久手町の桃畑の山土・掘れば赤土・青土が出て来ますが、それが少し備前より固く焼けますが使えそうです。また東広島の西条の山土は下り松の土に少し似ていて使えそうです。また、他の作家の方はオーストラリアの土とか朝鮮の土とかフランスの土が、結構使えるとも言っています。このように土は備前の命、源そのものです。バルブ期の様な粗製乱造は絶対・備前を衰退させるだけなので慎みたいものです。



この地図は下が北になります。木村さんの工房は大池の北側です

吉備国の語源「黄蕨」調査報告

日本先史古代研究会　会員　　丸谷　憲二

1　はじめに

吉備国の語源「黄蕨」については、平成 20 年 8 月の吉備学会歴史研究部会(岡山県立博物館)基調報告『吉備とはなんぞや』で報告しています。調査の経過をご報告致します。

平成 20 年 8 月 5 日に大井透氏(香川県坂出市)より、『陶山系譜』(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵:香川県高松市亀水町:五色台）の調査を依頼されました。『陶山系譜』の特長は神統譜。元祖は天照国照彦 火 明 命 とあり尾張連等の遠祖です。神話に登場する神々から始まる系図であり、それに近い事実が伝承されてきたと考えました。備中古名『黄蕨』（キハラ）とのルビが有ります。私にとって備中古名『黄蕨』（キハラ）は初見です。ご指導を受けている考古学、中世史の先生方に聞きまくりました。誰もご存知有りませんでした。大井透氏に一度は調査不可としてこお断り致しました。しかし、大井透氏の『黄蕨』（キハラ）が一番重要であるという立場に揺らぎがありません。

2　『黄蕨』の出典

『黄蕨』の出典は、推古 30 年（622）成立の『先代旧事本紀大成経七十二巻本』です。
『旧事本紀』は、『先代旧事本紀』と『神代皇代大成経』の二つから成立しています。尾張氏・物部氏等、六家の秘伝書と天皇家の内録という超古代の学問書を「一字一字変えないで写した」と言われるのは『先代旧事本紀』の部分です。『神代皇代大成経』には、聖徳太子が補足説明として付け加えた部分や太子自身が書いた『十七条五憲法』や『予言書』、さらに太子の死後、秦河勝らの手によって加えられた部分が含まれます。

『陶山系譜』

天照国照彦 火 明 命 → 天 香 山命　　越後国蒲原郡　伊夜日子神社

宇摩志摩治尊　石見国安濃郡　物部神社

神武天皇東国発向之為従_日向国_　移　_備中_ノ国兵官軍ニ　付　趣。則御武将宇摩志摩治尊之軍　虜　ナリ依而。皇居之名　神　嶋 宮ト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄_ル。皇居_地名也。三年之神遊兵根御船之数整内黄蕨（備中古名）之勇猛御方ニ馳集。宇摩志摩治尊　内裏為_メニ守護_之ヨツテ　司　所ヲ物部ト名シ給フハ是ヨリ始ル。武士をモノノフト訓スル。利ヨリ非起ルニ即物部別号ニ下ル由此城地今ノ要砂築クニ洲濱ヲ城之外ト堀ニ用ユルニヨリ諸人呼_フ洲山城_ト。天皇叡山聞而洲山ト給ヒ亦陶山ト下シ給フ也。八杉　田邊　原　澤山　高辻　奥村　右之氏陶山家ヨリノ別家武功軍記ニ有テ世ニ知ルノ所ナリ陶山ノ定紋洲濱ニ寄而洲濱ニ定メル。古城跡備中小田郡要砂村。古書ニハ西砂トアリ。

宇摩志摩治尊ヨリ七十五代　備中守高信　寿永三年（1184）屋島合戦ニ通盛教経トモニ勇々敷働後長洲赤間闘ニ而討死。

3　文献調査結果

岡山県立資料館と岡山県立図書館蔵書を調査しました。岡山県の歴史研究者として「黄蕨説を正しい」としているのは、『吉備国史』の小早川秀雄のみです。

成立年	説	記録
平成 13 年（2001）	『日本古代地名事典』吉田茂樹 『君・公説』	従来より「きび（黍）」の意として定着しているが、古代地名の比較検討からすれば、「きび（黍）」の意は、ほとんどないといってよい。大化前代より、ヤマト王権の片腕として活躍し地方の首長の尊称である「きみ（君・公）」を国名にした可能性がある。
平成 2 年（1990）	『岡山県史　第三巻　古代Ⅱ』　吉田晶 『不明・黍説紹介』	現在の岡山県全域と広島県東部を中心とする地域（美作・備前・備中・備後）は、古代では「吉備（きび）」と総称されていた。 なぜこの地域が「吉備」と呼ばれていたのかは明らかではない。

		古くから「黍（きび）」の豊かに稔る農耕の適地であったためであろうとする説が主張されているが、確かなことはわからない。
昭和 5 年（1930）	『岡山県通史』 永山卯三郎 『黍説』	『吉備の文字、一様ならず、日本紀に「吉備」日本紀纂疏に「寸簸（きび）」古事記に「岐備」又「黄薇」と記し又　夜叉国、廣遠国と見ゆ。』『吉備の名義大成旧事本紀に「・・・黄薇（キワラヒ）国、作者作吉備之字」と黄薇「キワラビ」省略されて「キビ」となると面白き説明なり。固より信據するに足らざる俗説なれども従来汎く世に行はれたる説なり。』 「吉備はキビ（黍）にして吉備国の土地、黍穀の耕種に好適しその産額頗る多く古来黍酒、黍団子の料となりしことは万葉集の歌にも見えて其の名産たり。」
嘉永 2 年（1849） 自序	『吉備国史』 小早川秀雄 『黄蕨説』	吉備国　大古は大八州の国とて八つ国有り其八つの一つは吉備の国なり。吉備とは何故に云う。其本きわらびの国と云ふ事を略して、きびと云ふなり。此国には黄なるわらびの多く生ずるの山国なれば吉備山とも云ふ。 藻塩草に吉備山を載せたり。古語拾遺に云ふ神武帝の時、高嶋宮にます事七年其時に黄なるわらび六本を生ずると云ふ。わらびは山に生ずる品物なれば上古は山のみにて田野は後に開き発（おこ）しぬる土地かとは思はる。
天保 8 年（1837）	『東備郡村志』 松本亮 『寸簸説』	「大成経には、人皇の大祖神武天皇東征して、吉備国に入り給ひ、高島の宮に在すとき、其行宮の庭に一夜に八の蕨を生ず。其長一条二尺、其太さ二尺五寸、其色濃黄、国有神人云黄光命。即朝奏曰、此草異艸也。当治八州祥、是天為端、軍卒競之故、道此国号黄蕨国とみえたり。ここに以て、吉備は黄蕨の転なるか。然れども其説疑ふらくは正しからず。按に、吉備国を日本記の釈に寸簸（きび）に作る。然れば吉備は寸簸の転なるべし。寸簸とは当国に名高き蓑山より起れるか。・・・」
安永 7 年（1778）	『寸簸乃塵　上巻』 土肥経平 『寸簸説』	「吉備国ていふは、吉備子州大八州の一にして、大日本のなり出し時にその称あれば、類もなき古き国名なり。是を寸簸国とも昔し書しより日本記の釈并纂疏に見えたり。又黄薇国ともかく。それは神武天皇東征したまふ時に、此国高嶋宮にしばし皇居の時、黄なる薇一夜の中に生出て、是を供御にまいらせしより、黄薇といふよし、大成経といふものに見えしといへども、此書據とすべきものならねば、信ずべからず。」
元文 4 年（1739）	『備陽国誌』 和田弥兵衛正尹　他 『不明・黄蕨説紹介』	「大成経に清貞天皇（忍海飯豊青尊）詔りして尾張の覚連を以て、黄蕨（吉備の文字を黄蕨と出来大正史に見えす、今此書に初て出たり。）の前中後を分とあり。是より先日本紀仁徳天皇六十七年に、吉備の中国といふ事見えたり。いづれか是なる事をしらす。」
貞享 2 年（1685） 中野氏版	池田家文書に 『古語拾遺言余抄（こごしゆういげんよしよう）』 竜野熙近　有り。	竜熙近は、寛文 3 年（1663）写『先代旧事本紀大成経破文』・延宝 9 年（1681）写『先代旧事本紀大成経破文要略（たいせいきょうはもんようりゃく）』の著者である。
大同 2 年（807） 編纂 807～906 年成立	『先代旧事本紀十巻本』 皇孫本紀 全 1 巻。 斎部広成 『記録無し』	吉田兼倶（かねとも）によって『古事記』『日本書記』と共に『三部の本書』として尊重された書物。初見は平安時代。 「先代旧事本紀巻六　皇孫本紀」に、 「乙卯年春三月甲寅朔己未。徒入吉備国。起行宮以居之。是曰高嶋宮。積三年間。脩舟檝蓄兵食。将欲以一挙而平天下也。」
明和 3 年（1766） 写	『先代旧事本紀大成経（せんだいきくじほんきたいせいきょう）七十二巻本』武田本 跋文の初句「夫大経者先天之神典、前代之聖史也」 羽柴純益平宗写 『黄蕨説の初見』	編纂者　聖徳太子・秦河勝。推古 30 年（622）成立。 神託に基づき五十宮、三輪宮、天王寺に秘蔵。 ○「先代旧事本紀　巻第三　陰陽本紀」より 「次生_黄蕨児嶋_」 「黄蕨国名面吉高雌」 「次黄日（蕨）児嶋謂（いい）_ 健（たける） 日方男_」

		「是斎元二神不レ同二異国諸神無一レ威、其法元也、先産二十有三柱神等一、先生二天水建大秋津彦(あきつひこ)」神一、次生二地水建小秋津媛(あきつひめ)神一、此神坐二黄蕨前国一宮一矣、潤二世界一神、有二威徳一神、此二神者水方神也」 ○「大成経　第十六　目録」より 「黄蕨津彦神」 ○「巻第十六　天孫本紀下」より 「大歳(だいさい)在二乙卯一、三月甲寅朔己未、従二入黄蕨国一分(げ)、起二行宮一居御、是曰二高島宮一、積二三年一滝、而楯二舟檝(かじ)一蓄二兵食一也、将二欲以一挙而平二天下一也、大己貴尊(おおあなむちのみこと)児木胯彦命神」、又黄蕨津彦命、為二国首一在二国頭(くにがみ)一見二天尊一、作レ敬與二児国(じこく)」」君命(くんめい)一、奉レ饗奉レ事、自造二陳具一、集レ兵調レ陳、進奉二皇軍一、于時行宮庭一夜生二八蕨一、其長一条二尺、其太二尺五寸、其色濃黄、国有二人神一、云二黄光命一、即朝奏曰、此草異草也、当治二八州一祥、是天為瑞、軍卒(ぐんそつ)競レ之、故道二此国一号二黄蕨国一」
『先代旧事本紀大成経七十二巻本』の原本 後藤隆　調査	編纂者　聖徳太子・秦河勝 推古 30 年（622）先代旧事本紀大成経完成。神託に基づき五十宮、三輪宮、天王寺に秘蔵 寛文 10 年（1670）『先代旧事本紀三十一巻』鶴鶴（ササキ）伝　白河本出版。 延宝 3 年（1675）『聖徳太子の五憲法』釈潮音道海禅師　著（黄檗宗黒瀧派・開祖）出版。 延宝 7 年（1679）『先代旧事本紀大成経七十二巻本』（潮音本）出版。 天和 1 年（1681）徳川幕府、『大成経七十二巻本』（潮音本）を禁書・回収処分。 明和 8 年（1771）京都・本屋仲間の『禁書目録』で先代旧事本紀大成経が目録筆頭となる。

4　考察

①　先代旧事本紀（せんだいくじほんき）は 3 つに分類されています。

①『先代旧事本紀十巻本』

②『先代旧事本紀三十一巻本』（白河本・寛文 10 年（1670）刊行）

③『先代旧事本紀大成経七十二巻本』

『先代旧事本紀大成経』（さきのみよの　ふることの　もとつふみ　おおいなるおしえ）に黄蕨説が記録されています。延宝 7 年（1679）『神代皇代大成経』として刊行。

天和 1 年（1681）徳川幕府、『大成経七十二巻本』（潮音本）を禁書・回収処分。

②　岡山県の歴史研究者として黄蕨説を正しいとしているのは、『吉備国史』の小早川秀雄のみです。

『先代旧事本紀十巻本』と『先代旧事本紀大成経七十二巻本』の記録を比較すれば、『先代旧事本紀大成経七十二巻本』が『先代旧事本紀十巻本』の原典であることは明確です。戦後の皇国史観に基づく日本史の見直し作業で偽作と断定されているが判断ミスです。

③　吉備の語源は黄蕨です。黄蕨説の「黄なるわらび八本を生ずる」の比喩している意味の解読が必要です。

注目すべきは『寸簸乃塵』・土肥経平の『寸簸説』です。寸簸は「スンハ・ソンハ」です。『日本書紀』『日本書紀纂疏（にほんぎさんそ・一条兼良著・卜部兼右写）』『日本書紀抄』『釈日本紀』を検証しても寸簸との記録はありません。何故、検証すれば間違いとわかる　説を書名にまで使用しているかを考察すべきです。『寸簸乃塵』の出版は安永 7 年（1778）であり、明和 8 年（1771）京都・本屋仲間の『禁書目録』で先代旧事本紀大成経が『目録筆頭』となっています。研究者として大成経の黄蕨説を紹介し『黄蕨説』が正しいと考えても「信ずべからず」としか発表できない時代背景を読み取らねばなりません。

④　永山卯三郎は二次・三次資料により「黍説を創作」しています。

薇はわらびの一種の「のえんどう・ふなばらそう」です。『古事記』に「岐備」・「黄薇」・夜叉国・廣遠国との表記は活字本では発見できません。しかし、書写の時代であり誤写があったのかも知れません。

6　まとめ

「キハラ」とのルビに注目しました。「蕨」の読みは「ワラビ・カツ」でありハラとは読めません。長尾小八郎家系図に「九代目　式部大輔　正四位　清幸　於テ学館院韻鏡訓鏡書ヲ製作ス」とあります。学館院の具体的な教育研究内容の記録です。

韻鏡の研究とは漢字音の研究であり中世以降韻学の中心議題となりました。南宋の紹興31年(1161)に張麟之が入手し、50年に及ぶ研究の後、序文をつけて初めて刊行されました。

岡山県の江戸時代から戦前までの研究者は『先代旧事本紀大成経七十二巻本』の記録を「８本の黄色いワラビ」と訓読みし「黄色いワラビ」を植物生態学と考え「ワラビの突然変異」として考察しています。私は、この基本認識は間違っていると考えました。

7　参考文献

①『先代旧事本紀大成経（一）・続神道体系　論説編』小笠原春夫校注　平成11年　神道体系編纂会
②『先代旧事本紀・新訂増補　国史大系7』昭和41年　吉川弘文館
③『古代物部氏と先代旧事本紀の謎』安本美典　平成15年　勉誠出版
④『謎の根本聖典・先代旧事本紀大成経』後藤隆　2004年　徳間書店
⑤『国書総目録　第三・六巻』昭和48年　岩波書店
⑥『岡山県の地名　日本歴史地名体系34』　1988　平凡社
⑦『日本古代地名事典』吉田茂樹　2001　新人物往来社
⑧『第一節　吉備社会と大和　岡山県史　第三巻　古代Ⅱ』吉田晶　平成2年　岡山県
⑨『岡山県通史』永山卯三郎　昭和5年　昭和51年復刻　岡山県通史刊行会
⑩『吉備国史・新編吉備叢書　第一巻』小早川秀雄　昭和51年　歴史図書社
⑪『東備郡村志・吉備群書集成（二）』松本亮　昭和45年　歴史図書社
⑫『寸簸乃塵　上巻・吉備群書集成（一）』土肥経平　昭和45年　歴史図書社
⑬『備陽国誌・吉備群書集成（一）』和田弥兵衛正尹他　昭和45年　歴史図書社
⑭『池田家文書総目録』昭和45年　岡山大学付属図書館
⑮『日本書紀纂疏・日本書紀抄・天理図書館善本叢書　和書之部　第二十七巻』昭和52年　天理大学図書館
⑯『釈日本紀・新訂増補　国史大系　第八巻』昭和45年　吉川弘文館
⑰『日本書紀前篇・新訂増補　国史大系　第一巻上』黒坂勝美　昭和41年　吉川弘文館
⑱『古事記祝詞・日本古典文学大系1』倉野憲司　武田裕吉校注　昭和33年　岩波書店
⑲『風土記・日本古典文学大系2』　秋本吉郎校注　昭和33年　岩波書店
⑳『釈日本紀三・日本古典文学大系14』青木和夫校注　1992　岩波書店
21『釈日本紀一・日本古典文学大系12』青木和夫校注　1989　岩波書店
22『日本書紀通釈　第一』飯田武郷　昭和5年　内外書籍
23『芸備国郡志　下・備後叢書　第二巻』昭和54年　芸備郷土誌刊行会

平成22年5月31日

編集後記

○　120 名の多くの方の参加を戴いた設立総会（2009 年 5 月 30 日）と記念講演会から早くも 1 年が経過しました。若狭会長の予期せぬ骨折などのトラブルがあり、その間会務が停滞したことをお詫びいたします。幸い会長も心身共に健康になられ元気な姿を我々に見せて戴きました。

○　当面は会員を中心とした研究発表や実施探索の例会活動を中心に会運営を進めます。６月 19 日は会員の丸谷憲二氏が備前市伊里公民館での講演を支援しサポートして研鑽を深めました。もう一つの柱である「機関誌」発行は有志による編集委員会を開催し、多くの会員の投稿・寄稿を戴きながら例会活動を補完させて参ります。

○　機関誌の名称は当面、「仮称“きび”考」として進めますが、暫時皆様からのご意向を集約して後日正式名称を決めることになりました。若狭会長からＡ案＝蝸牛（かたつむり）Ｂ案＝歩み（あゆみ）の提案ありましたので紹介します。参考にして下さい。仮称“きび“考　の意図は「先史」「古代」に限定せず、有史（歴史）・民族学・考古学並びに皆様の多様な分野の研究・実践活動の発表の「場」としたい気持です。当然エッセイや紀行文など掲載したいと念じています。寄稿文は随時事務局で受付けています。広い意味で「設立宣言」に沿う内容を期待しています。

○　今回は記念講演と基調講演の収録記事を中心に掲載しました。1 年前を思い出しながら通読して頂き感想などを戴ければ、次回からの参考にさせていただきます。最後に会員の皆様のご健勝と益々の研究・研鑽を期待しております。

仮称“きび”考　創刊号　2010 年（平成 22）7 月 1 日発行

編集委員　延原勝志　井上秀男　樋口俊介　本松一郎　山崎泰二
発　行　日本先史古代研究会
会長　若狭哲六　岡山県備前市東片上 771
事務局　岡山県岡山市中区桑野 504-1　山崎泰二方
電話＝086-276-6654　メール＝top@bosaisystem.co.jp
FAX=086-276-2241